

NEWSLETTER

No.30

2013年11月5日

会長 林 宅男 事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学外国語学部
山本英一研究室内

psj.secretary@gmail.com http://www.pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 支店名:099 当座口座番号:0130378 口座名:日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第30号をお届けします。第16回大会の概要(チュートリアル申し込み要領)・特別講演会の開催・学会の一部業務委託の開始・ロゴマークの公募等についてのお知らせがあります。

=====

★副会長メッセージ

<明治時代のコミュニケーションから

最新のサイバーコミュニケーションまで>

日本語用論学会 副会長 東森 勲

日本語用論学会会員の皆様へ

今年は異常に長い暑い夏でしたが、いかがおすごしでしょうか。本年度12月の大会は、慶應義塾大学で開催されます。以前の神奈川大学に続いて関東では2回目の開催です。関西の会員がもともと多い本学会ですが、皆様、ふるってご参加していただきたいと思っております。

柳父章(1982)『翻訳語成立事情』(岩波新書)によると英語 *society* の訳語を福沢諭吉は1868年「人間交際」と考え、その後「社会」という訳語が定着するまでいろいろと問題があったようです。当時まだ日本には *society* に対応するような現実がなかったと記されています。特に同じ種類どうしの人の結びつきをどのような日本語で訳語を付けるかということで揺れであったようです: 1814 同伴、ソウバン、1862 仲間、交り、一致、1867 仲間、組、連中、社中、1873 会、会社、連衆、交際、合同、社友——柳父章(1982:4-5)

慶應義塾大学には三田演説館があり、福沢諭吉が *speech* の訳語として「演説」を考え、日本で初めて演説を実際に研究するためこの建物が造られました。(学会参加の人はどこにこの建物があるか探してください。) 大勢の人の前で自

分の意見、主義、主張を述べる西洋コミュニケーション形式が当時の日本にはなく、こまったようです。

今、若者の間では、就職に「コミュニケーション能力」がいるとか、「高度情報化社会」とか言われていますが、人間が行うコミュニケーションは、明治から現代になりどのように変わったのでしょうか? 書き言葉では昔のような手紙の形式は少なくなり、メールの文章のように短いものとなり、話しことばもパソコン内に現実世界を再現したチャットルームでは、部屋を出たりすることを、「出る」とは言わないで「落ちる」といってチャットをやめる、もしくは中断する行為を指したりします。

「ぼくの友達(動物の森)からようやく帰ってきました。」という発話理解も「動物の森」が具体世界のたくさん動物のいる森の意味から、「動物の森」というゲームの世界から現実の世界に帰って来たという意味まで、語用論における指示付与の問題、理解のずれや誤解となるコミュニケーションの研究などとも関連するでしょう。

英語でも次のジョークのテキストはとても短く、それを理解するには語用論により豊かにしていく作業を含んでいます。

(1) W DU CA F sh Who Mks Movis? A * Fsh!

(=What do you call a fish who makes movies? A starfish!)

(2) YsA Surgeon LK A Shp Kpr? Bth Strt Wrk @ Opnin Tim!

(=Why is a surgeon like a shop keeper? Both start work at opening time!)

--- TRIFIC Jokes, (2002) TOP THAT!

このような現代における新たなコミュニケーション研究も *cyberpragmatics* という名称ですすでに研究がスタートしています<Yus, F.(2011)

Cyberpragmatics: Internet-Mediated Communication in Context. Amsterdam: Benjamins.>

最後になります、このような多方面の言語使用のおもしろいデータとその詳しい分析を通して語用論研究が日本でもますます盛んになることを期待しています。

★ 第16回大会のお知らせ

2013年度の第16回大会は、以下のとおり開催されます。

■2013年12月7日(土)～8日(日)

■慶應義塾大学三田キャンパス

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

大学ウェブサイト:

<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>
アクセス情報:

<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>

(1) JR 山手線/京浜東北線・田町駅より徒歩8分

(2) 都営地下鉄浅草線/都営地下鉄三田線・三田駅より徒歩7分

(3) 都営地下鉄大江戸線・赤羽橋駅より徒歩8分

■参加費:2,000円(会員)、3,000円(非会員)
(昨年度のProceedings代、Abstract集代金などを含む)。

■主なプログラム

◀12月7日(土)▶

9:30 受付開始

10:00～12:00 チュートリアル『会話分析』

(第一校舎)

講師:西阪仰(明治学院大学教授)

参加費:無料(但し、語用論学会参加登録は必要です)

参加者定員:16名

申し込み方法:katosige@let.hokudai.ac.jp

あてに、(1)氏名(よみがなも)、(2)所属(学部生・院生は学年も)、(3)研究テーマを記して、電子メールで申し込んで下さい。その際、メールのタイトル(subject)を「語用論学会チュートリアル申し込み」としてください。

申込締切:2013年11月20日(水)24時

注意:語用論学会会員を申込順に受け付けます。また、西阪先生の講習会などをこれまで未受講の方を優先とします。申込期間中でも、定員を超えた場合は、申し込み受け付けは終了します。受講者には別途連絡します。当日は9:50までに受付を済ませて、会場にお越し下さい。遅刻すると受講でき

ないことがあります。受講日までに『会話分析基本論集:順番交替と修復の組織』(H.サックス, E.A.シェグロフ, G.ジェファソン 著, 西阪仰訳, 2010, 世界思想社)を読んでおくようにして下さい。

10:00～11:40 ワークショップ(第一校舎・4会場)

13:00～13:20 会員総会(北館ホール)

13:30～16:05 研究発表(英語発表2会場・日本語発表3会場)(第一校舎)

16:15～17:45 基調講演(北館ホール)

講師:ミラ・アリエル教授(テルアビブ大学)

司会:堀江薫(名古屋大学)

Keynote Speech "Pragmatic meanings: Beyond implicatures" Professor Mira Ariel (Tel Aviv University) (Chair: Kaoru Horie / Nagoya University)

18:00～20:00 懇親会(カフェテリア)

(一般4000円, 学生3000円。参加費は大会受付にてお支払いください)

◀12月8日(日)▶

9:00 受付開始

9:30～12:40 研究発表(英語発表2会場/日本語発表3会場)(第一校舎)

12:45～14:25 ポスター発表

14:30～17:00 シンポジウム"Implicature"

(北館ホール)

司会:Lawrence SCHOURUP

(Osaka Prefecture University)

指定討論者:Mira ARIEL

(Tel Aviv University)"

講演者:

- ・Hiroaki TANAKA (Kyoto Institute of Technology)[田中廣朗・京都工芸繊維大学]
- ・Akiko YOSHIMURA (Nara Women's University)[吉村あき子・奈良女子大学]
- ・Tomoko MATSUI (Tokyo Gakugei University)[松井智子・東京学芸大学]

17:00～ 閉会式(北館ホール)

■研究発表とワークショップの詳細、また各発表のアブストラクトについてはプログラムと学会HPをご覧ください。書店展示(研究社・ひつじ書房・開拓社・くろしお出版など)もあります。

■受付について

会員については会員番号による受付をいたします。Newsletterの宛名シールに会員番号を明記しています。その番号をお持ちください。

■当日の昼食

お弁当は手配しておりません。学外へ食事に出られるか各自ご持参ください。ランチマツ

ブを当日配布予定です。

■ホテルの紹介

学会ではホテルの紹介はいたしておりません。各自でご手配ください。

★特別講演会

日時：12月9日（月）10:30～12:00

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 8号 408

Professor Mira Ariel (Tel Aviv University)

"Semantics and Pragmatics"

ミラ・アリエル教授（テルアビブ大学）

『意味論と語用論』

【参加費】無料。どなたでも参加できます。当日会場にお越し下さい。

【主催】早稲田大学法文学術院（問合せ：首藤研究室 shudo@waseda.jp）

《事務局より》

★ 学会業務の一部業者委託について

長らくお待たせいたしました。学会業務の一部を業者（株）プロアクティブに委託することで、ウェブを利用したサービスが始まります。主なサービスは、過去の会費納入についての確認、住所や所属先の変更がウェブ上で可能になること、そしてクレジットカードでの会費納入が選べることです。

会員の皆様には、本学会のホームページを閲覧とともに、マイページを使って、リアルタイムで情報の確認・更新をしていただけます。アクセスには、ID とパスワードが必要です。別途、郵送にて必要な情報をお送りしますので、ご確認ください。

なお、これまで通り、郵便局からの会費納入も可能です。ウェブサービスをせいぜいご利用ください。

★ プロシーディングズについて

これまで希望者には、冊子（紙媒体）でご用意しておりましたが、ほとんど希望される方がおられませんので、本年より CD-ROM による配布のみといたします。

★ 運営委員等について

新たに7名の先生に運営委員にご就任いただき、学会運営の充実を図ることになりました。運営委員の詳細につきましては、学会ホームページをご覧ください。なお、会計担当者の交替があり、長友俊一郎先生（関西外大）にお願いすることになりました。

★ 会費納入のお願い

■今年度の会費を、11月末までにお払いください。

■昨年度までの会費が未納の方には、連絡用紙を同封しております。学会の会計をご理解の

上、未納の分も併せてお払いください。行き違いがございました場合は、ご容赦ください。

■会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっていきます。

■振替用紙が同封されていない方は、すでに今年度の会費が納入済みの方です。ご協力ありがとうございます。

■年会費は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円です。（正しい額でのご入金にご協力お願いいたします。）

■会費の振込先は以下の通りです。近年、所属機関のお名前のみでご入金される方が増えてきました。会員名の確認に手間取りますので、必ず会員ご自身のお名前をお書き添えください。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：

郵便振替口座：00900-3-130378（ゆうちょ銀行）
口座名：日本語用論学会

このほか、次の2・3の振込先もご利用いただけます。

2. 他銀行のATMから振り込む場合：

ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：0130378 口座名：日本語用論学会（ただし、振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行のATMからも振り込みが可能です）

3. ATMからの銀行振り込み：三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号 546 口座番号 3755278 日本語用論学会 長友俊一郎（ただし、他銀行からは振り込み手数料がかかります）

（お願い）2の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また3の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計（長友俊一郎：psj.treasurer_at_gmail.com）にお支払の年度とお名前、会員番号、所属、住所（また、所属、住所に変更がある場合も同様）をメールでお知らせいただければ幸いです。

■国外からのお振り込みには、

http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/kaigai/sokin/kj_tk_kg_sk_gaikoku.html（日本語版）

http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en_djp_index.html（英語版）をご使用ください。

■ID・パスワードが到着後は、ウェブページよりクレジットカードを利用した振込が可能ですとなります。

《編集委員会より》

★第15号応募状況、審査状況について

研究論文14本、研究ノート1本の投稿がありました。ただいま査読結果をまとめているとこ

ろです。採択結果については、11月中に投稿者にお伝えできるかと考えております。

★第16号への投稿募集について

16号への投稿を募集しております。研究論文だけに限らず、研究ノートやディスカッションについても受け付けておりますので、ふるってご応募ください。

☆☆☆☆☆☆

《新刊・近刊案内》

(紹介文は出版社によるものです。)

■日本語は親しさを伝えられるか(そうだったんだ!日本語) 滝浦真人 著 岩波書店 定価1680円(2013/4/25) ISBN978-4000286220

わたしたちが普通だと思っている標準語の所作はずいぶんと丁寧に堅苦しくはないだろうか。「敬して避ける」ための敬語はあっても、「親しく交わる」ための言葉は育まなかつた。「作法」に寄りかかってきた日本語のここ百年をたどり、成熟した「親しさのコミュニケーション」への変化のきざしを見いだす。

■子どものうそ、大人の皮肉——ことばのオモテとウラがわかるには(そうだったんだ!日本語) 松井智子 著 岩波書店(2013/6/26) 定価1680円 ISBN 978-4000286244

3歳ともなると子どもは一見会話らしいやりとりができる。だが、ことばで自分の意図をきちんと伝え、ことばから相手の意図を正しく理解できるようにするのは、まだ何年も先のこと。それは大人にとっても簡単ではなく誰でも失敗したことがあるはずだ。発達途上の子どものことばを手がかりに伝わる理由・伝わらない理由を探る。

■対人関係の言語学: ポライトネスからの眺め(開拓社言語・文化選書) 福田一雄(著) 開拓社(2013/6/25) 定価1995円 ISBN 978-4758925389

沈黙するか、そっと伝えるか、ずばり言うか、それとも意図を明示し、かつ聞き手に配慮して話すのか。言語の対人関係的機能を Brown and Levinson のポライトネス理論から考察。ポライトネスは、敬語や「丁寧さ」とどう違うのか。理論言語学的議論に加えて、著者の私的視点も思い切って導入。楽しく読める語用論の入門書。

■相席で黙っていられるか——日中言語行動比較論(そうだったんだ!日本語) 井上優(著) 岩波書店(2013/7/25) 定価1680円 ISBN 978-4000286251

「娘と息子、どっちがかわいい?」日本人が首をかきげる中国人の質問。「これ誰の?—うーん、誰のかなあ」実は不思議な日本人の答え方。中国人の妻との日常生活を通じて、数えきれない「あれ?」と出会ってきた著者が説く、「こう考えれば理解しあえる」!さまざまな場面で応用できる、対照言語学的「比べ方」のすすめ。

■文法とは何か—音韻・形態・意味・統語のインターフェイス—(開拓社言語・文化選書40) 西原哲雄 著 開拓社(2013/10) 定価1,785円(税込) ISBN:978-4-7589-2539-7

本書は、英語を中心として、日本語やその他の言語におけるそれらの言語活動を概説したものです。そして、統語論と音声・音韻部門、意味論や形態論、語用論などの分野が相互に関連していること明らかにしました。

■ことばを読む、心を読む—認知語用論入門—(開拓社言語文化選書42)

内田聖二著 開拓社 定価1,995円(税込) (2013/10/25) ISBN:978-4-7589-2542-3

「ゴキブリだ!」という発話は「ゴキブリがいる」という新しい情報を相手に伝えることもあるが、発話される状況によっては、驚きや警告などいろいろな意味にも解釈できる。限られた文字情報からどのようにして話し手、書き手の「心」に迫ることができるのであろうか。認知語用論としての関連性理論の知見を援用して、発話、メタ表象現象、修辞表現、テキストの統一的な説明を試みる。

■談話論と文法論—日本語と韓国語を照らす— 金珍娥 著 くろしお出版 定価3675円

(2013/10/20) ISBN:9784874246016 C3081 <談話論>と<文法論>。その2つの統合された平面を、日本語と韓国語を照らす対照言語学の中に据える試み。圧倒的な量と質の言語事実に基礎を置き、理論的な枠組みや諸概念を最も深いところから照らす。

■コミュニケーションの起源を探る(ジャン・ニコ講義セレクション) マイケル・トマセロ(著) 松井智子・岩田彩志(訳) 勁草書房(2013/11/30) 定価3675円 ISBN-13: 978-4326199631

人間の身振りによるコミュニケーションは、乳

幼児によるものさえ、大型類人猿のそれよりも複雑な情報を含んでいる。このようなコミュニケーションは、人間が互いの志向性を共有し合うからこそ可能になった。人間固有のコミュニケーションは、どのように進化し、発達してきたのか。比較認知科学の名著、待望の邦訳。

■ **Relevance Theory (Cambridge Textbooks in Linguistics)** Billy Clark DA 著 (2013/08) ISBN 9780521702416

Over the past twenty years, relevance theory has become a key area of study within semantics and pragmatics. In this comprehensive new textbook, Billy Clark introduces the key elements of the theory and how they interconnect. The book is divided into two parts – the first providing an overview of the essential machinery of the theory, and the second exploring how the original theory has been extended, applied and critically discussed. Clark offers a systematic framework for understanding the theory from the basics up, building a complete picture and providing the basis for advanced research across a range of topics. With this book, students will understand the fundamentals of relevance theory, its origins in the work of Grice, the relationship it has to other approaches, and its place within recent developments and debates.

■ **Accessing Noun-Phrase Antecedents (RLE Linguistics B) (Routledge Library Editions: Linguistics)** Mira Ariel 著 Routledge (2013/12/6) ISBN: 978-0415723541

Accessing Noun-Phrase Antecedents offers a radical shift in the analysis of discourse anaphora, from a purely pragmatic account to a cognitive account, in terms of processing procedures. Mira Ariel defines referring expressions as markers signalling the degree of Accessibility in memory of the antecedent. The notion of Accessibility is explicitly defined, the crucial factors being the Salience of the antecedent, and the Unity between the antecedent and the anaphor.

This analysis yields an astonishing array of new results. The precise distribution of referring expressions in actual discourse is directly predicted. Several universals of anaphoric relations are stated. Thus, although not all languages necessarily have the same markers, and nor do they assign them precisely the same function, Ariel shows

that they all obey the same Accessibility marking hierarchy.

This book will be compulsory reading for anyone with an interest in the semantics and pragmatics of referring expressions, in the interaction of semantics and pragmatics, and more generally in the interaction between peripheral and central cognitive systems.

■ **Intercultural Pragmatics**

Istvan Kecskes 著 Oxford Univ Pr (Txt) (2013/12/4) ISBN-13: 978-0199892655

Intercultural Pragmatics studies how language systems are used in social encounters between speakers who have different first languages and cultures, yet communicate in a common language. The field first emerged in the early 21st century, joining two seemingly antagonistic approaches to pragmatics research: the cognitive-philosophical approach, which considers intention as an /a priori/ mental state of the speaker, and the sociocultural-interactional approach, which considers it as a /post factum/ construct created by both speaker and hearer through conversation. Istvan Kecskes, an early proponent of intercultural pragmatics, was among the first to propose merging the two to form the socio-cognitive approach now core to the field.

In /Intercultural Pragmatics/, the first book on the subject, Kecskes establishes the foundations of the field, boldly combining the pragmatic view of cooperation with the cognitive view of egocentrism in order to incorporate emerging features of communication. He argues that people cooperate by generating and formulating intention that is relevant to the given actual situational context. At the same time, however, because of their egocentrism they activate the most salient information to their attention in the construction and comprehension of utterances.

Within this approach, interlocutors are considered as social beings searching for meaning with individual minds embedded in a socio-cultural collectivity, and intention is a cooperation-directed practice that is governed by relevance which depends on actual situational experience.

Intercultural pragmatics is a rapidly-growing field, and the only subfield of pragmatics to

incorporate features of intercultural interaction into mainstream pragmatics. This volume offers both a valuable synthesis of current research and a new way to think about pragmatics.

■ **Relationship Thinking: Agency, Enchrony, and Human Sociality (Foundations of Human Interaction)** N. J. Enfield 著

Oxford Univ Pr (Txt) (2013/11/26) ISBN 978-0199338733

In *Relationship Thinking*, N. J. Enfield outlines a framework for analyzing social interaction and its linguistic, cultural, and cognitive underpinnings by focusing on human relationships. This is a naturalistic approach to human sociality, grounded in the systematic study of real-time data from social interaction in everyday life. Many of the illustrative examples and analyses in the book are a result of the author's long-term field work in Laos.

Enfield promotes an interdisciplinary approach to studying language, culture, and mind, building on simple but powerful semiotic principles and concentrating on three points of conceptual focus.

The first is human agency: the combination of flexibility and accountability, which defines our possibilities for social action and relationships, and which

makes the fission and fusion of social units possible. The second is enchrony: the timescale of conversation in which our social relationships are primarily enacted. The third is human sociality: a range of human propensities for social interaction and enduring social relations, grounded in collective commitment to shared norms. Enfield's approach cuts through common dichotomies such as 'cognitive' versus 'behaviorist', or 'public' versus 'private', arguing instead that these are indispensable sides of single phenomena. The result is a set of conceptual tools for analyzing real-time social interaction and linking it with enduring relationships and their social contexts. The book shows that even - or perhaps especially - the most mundane social interactions yield rich insights into language, culture, and mind.

日本語用論学会
ロゴマークデザイン募集のお知らせ

このたび、日本語用論学会は創立 15 年を記念して学会の新しいシンボルとなるロゴマークデザインを公募することとなりました。ロゴマークは、学会ホームページ、会報及び学会からの配布物に掲載するほか、年会・シンポジウムなどの学会主催行事での掲示物等に使用いたします。また、日本語用論学会が刊行している学会誌『語用論研究』にも使用することを予定しています。会員の皆様も奮ってご応募のほど宜しく願い申し上げます。

■締め切り：2013 年 12 月 1 日(日)

■賞金：5 万円

■問い合わせ先：logo@pragmatics.gr.jp (日本語用論学会広報部ロゴマーク公募係)

※応募方法や送付先等についての詳細は語用論学会ホームページを御覧ください。